



特定非営利活動法人POTA POTA 就労支援事業部 ニュースレター

ぽ
た

就労支援事業部第6回研修会 報告



POTA就労支援事業部第6回研修会が平成22年5月22日(土)に開催されました。

テーマ：うつ病の方への就労支援
～OTにできること～

会場：東京YMCA医療福祉専門学校

参加者は41名、遠方から参加して下さった方もおり、就労支援に対する強い思いを感じました。就労支援のプログラムをすでに行っている方やこれから立ち上げようと考えている方、病院内で勤務している方やデイケアでの勤務、行政関係者など、様々な立場から参加されていました。

前半は、NTT東日本関東病院の岡崎先生より、うつ病の就労支援—OTにできること—というテーマで、うつ病についての概論をお話していただき、現代型のうつ病が増加していることやその特徴を知ることができました。その後、復職リハビリテーションの目的を具体的にお話いただきました。

研修会の様子をお伝えするために参加者からのコメントをいくつか紹介したいと思います。



・うつ病の就労支援という形で関わることはほとんどありませんが、今後当院でも力を入れていきたい分野でもあり、大変参考になりました。

・概要から具体的に説明していただいたのでわかりやすかったです。内容が濃くて聞かせていただけなかった後半の内容をぜひまた次の機会で聞きたいです。

・どういう視点で関わっていかなければならないかということを確認でき、大変実りのある研修になりました。

・OTとしての基本的なスキル・考え方・進め方について理解できました。細かい差はありますが、根本的に大切となることは共通していると思ひ、再確認できるような気がします。

後半は、大泉病院のうつ病の方へのプログラム『ほっとステーション』の紹介をしていただきました。プログラムの経緯から内容までくわしくお話していただき、実際にこのプログラムに参加されているメンバーの方からグループについてのことなどをうかがうことができました。グループに参加していて、仕事で考えが煮詰まった時に新たな視点を獲得することができる、気分転換になるなどの感想が聞かれました。メンバーの方やグループ運営に関わっているスタッフ(看護師・臨床心理士)の話を通じて聞くことができとてもわかりやすく、また、和やかな雰囲気でした。

参加者からは以下のような感想がありました。

・就労後のフォローとして必要なプログラムだと思いました。(次頁に続く)

(前頁よりつづき)

・居心地のよさそうなプログラムだと感じました。今後こういった形で発展していくのかが知りたくなる内容でした。

・うつ病の方は長い経過をたどるので、1か月に1回でも顔を合わせる小集団の場があるのは「ほっと」できるのでしょうか。

・メンバーの方のお話が非常によかったと思いました。

その後、質疑応答・情報交換の時間では参加者の各施設がどのような就労支援の取り組みを行っているか紹介をしたり、アドバイスや同じ悩みを共有したりととても有意義な時間となりました。

最後に、今回の研修会の運営にはいつも相談コーナーに参加されている方々が、受付や司会を手伝ってくださいました。ありがとうございました。

(報告：市川)



POTAへのメール

→ 皆さんへ

※いつも相談コーナーに参加されている宮本さんからメールをいただきました。宮本さんからのメールはいつも多くのことを考えさせられます。皆さんにもお読みいただきたいということで、掲載させていただきました(編集部)。

四ツ谷に『自由と生存の家』という家があります。リーマンショック以降、派遣切り、失業、職と住まいを失う人達が増えました。このような人達が安く入居できるようにと、『フリーター全般労働組合』の人達を中心に、古いアパートを借り上げ、2009年2月に四ツ谷に開設しました。『自由と生存の家』は、もうすでに満室状態で、今度は2軒目を建設するのだそうです。

この『自由と生存の家』を建設する際、いろんな苦労があったそうです。仲間の不和や、資金の事。でも、こうした苦難を乗り越え、みんなに無謀と言われながらも、1軒目が完成。その後は、こういう活動に賛同してくれる地域の人達も増え、今度は2軒目を建設予定。先日私は、この『自由と生存の家2軒目建設支援大集会』に行ってきた。そこで『自由と生存の家』の実行委員の方は、「私達は、危険な目にあったら交番に駆け込む。交番は各地に沢山ある。でも自分達が家を失った時、どこにも駆け込む所がなく、相談できる場所もない。自由と生存の家は、生活に困った時に駆け込む事ができ、相談できる場所になって欲しい。そういう場所を沢山増やして行きたい」と言っていて、この言葉が印象的でした。『自由と生存の家』では、家は確保できたけれど、今度は仕事がなかなか見つからない。という現実を目の当たりにし、だったら「自分達で仕事を作ろう」という事で、産地の農家や団体と交流し、無農薬、減農薬野菜を直売するという仕事を始めました。毎月一回定例の『野菜市』を開催し、野菜を販売しています。その中で地域住民の人達との交流が始まり、住民の人達の提案で野菜をリアカーで引き売りをする商売などの試みが始まっています。

お金になる仕事ではないそうですが、『働く』『仕事をする』という喜びを感じるそうです。私も、その野菜を買った事があるのですが、無農薬で大きいじゃがいもが、5、6個入って100円。安くて、おいしくて、近所のスーパーと全然違うな~と思いました。

こういう人達の活動を見ていると、凄いな~と思います。安心して暮らせる住まいを作ろうとか、企業が自分達の事を雇ってくれないのら、自分達で仕事を作ろうとか。『自由と生存の家』に住んでいる人の中には、会社に入っても、対人関係が上手くいかず、辞めざるおえなくなった人もいたり、脳梗塞で倒れ、後遺症があるけれど、リハビリで、野菜の引き売りをしていたり、生活保護を受けている人達も住んでいます。みんな、それぞれが、自分達の持っている能力を活かしながら、そして地域に根差しながら生活再建に取り組んでいます。

企業の中で、組織の中で正規雇用で働く事こそが、真の『自立』で、『頑張っている人』だと考えてる人達もいますが、私は、『自由と生存の家』のような場所があってもいいし、必要だと思いました。

そこにいる人達は、決して甘えているわけでもなく、自立してないわけでもないと思うし、『この人は頑張っている、この人は頑張っていない』という事は、他人が見て判断できる事ではないと思います。

でも、こんなふうに言っている私も、その一方では、「私は、こんなに頑張ってるのに」と思ったりします。矛盾だらけなのです。でも、こんなふうに思う自分も自分自身であり、こういう気持ちと折り合いをつけていかなければならないのだな…と思う今日この頃です。

7月の相談コーナーのお知らせ

7月の相談コーナーは、以前から提案されてきましたハイキングを兼ねて、障害者雇用にも取り組んでおられるというブルーベリー農園「ベンスファーム」を訪問したいと思います。太陽の恵み・畑からの贈り物を、思い切り味わって、一緒に楽しみませんか！！



日時 :7月31日(土)PM2:00~4:00

場所 :ベンスファーム 東京都小平市鈴木町1-464 電話042-327-0644

予約団体名:POTA(受付に伝えてください)

予定:PM2:00~ **障害者雇用のオーナーの話や当事者の体験談**

その後、ブルーベリーの摘み取り(それほど時間はかからないようです)

費用 入園料:大人1人 200円(POTAで負担する予定です)

ブルーベリー:100グラム 200円 お花の切り取り:1本30円~80円位

喫茶店があり食事が出来ます。早めに行って昼食を摂ることもお勧めです。

バスでのアクセス(立川バス)

西武新宿線、花小金井駅南口「国分寺駅北口」行きバス

「共済住宅」下車、徒歩3分。

JR中央線、国分寺駅北口

「大沼団地」「花小金井駅南口」「昭和病院」行きバス

「共済住宅」下車、徒歩3分

(バスは、全便バリアフリー対応車両での運行です)

「横濱屋」の大きな看板が目印です。

詳しくはサイトへアクセス <http://www.bensfarm.com/summer.html>



情報アラカルト

ここでは就労支援および精神保健福祉に関連した情報を紹介しています。

精神疾患患者への訪問支援、導入合意 厚労省検討チーム

(asahi.com 2010年6月17日)

地域精神保健医療の体制を話し合う厚生労働省の検討チームは17日、医療や福祉の専門家チームが精神疾患患者の自宅を訪ね、治療や生活の相談に乗る訪問支援を本格導入することで合意した。重症患者の治療が長期入院に偏っている現状を改め、地域で患者を支える体制に大きく転換することになる。

検討チームは、人材を育てて医師や看護師らによる多職種チームが担う▽医療機関はベッド削減に取り組む▽住まいの整備を併せて行う、などの方向で一致した。厚労省は来年度予算の概算要求に関連の費用を盛り込む方針。

在宅の精神疾患患者を専門家が支える活動は欧米で「アウトリーチ」と呼ばれ、日本にもすでに12チームある。そのうちの1つは検討チーム委員の精神科医、高木俊介さんが6年前に全国に先駆け京都市を拠点にして始めた。医師や看護師、精神保健福祉士ら15人が24時間態勢で患者約120人を回る。

統合失調症で20年以上入退院を繰り返した男性(47)は3年前に一人暮らしを始め、高木さんらの支援を受ける。週4回、看護師らが訪ね、生活上の悩みや服薬の相談に乗る。スタッフは携帯電話の番号を伝え、緊急時に出動することも。男性は「家で勉強できてうれしい」と話す。

高木さんによると、チームの経費は年間約1億円。公的医療保険の診療報酬でまかなえる。「入院治療だと3倍はかかる」と指摘する。

日本では精神科に33万人が入院し、入院患者の4分の1を占める。平均在院日数は313日、約4割の人が5年以上入院している。欧米では入院治療は人権上の問題もあるとして訪問支援を積極的に導入している。

厚労省は6年前に「入院から地域への移行」を宣言したが、実現は遅れている。検討チームの会合に招かれた元患者は入退院を繰り返した体験について、「自尊心を100%失った」と訴えた。鉄格子がはめられた部屋に閉じこめられ、売店にも行けなかったという。(岡崎明子)



手と手、心と心をつなぐPOTAは精神科作業療法に関わる
全ての方に幸せを届けます

特定非営利活動法人POTA 就労支援事業部

<http://www.npota.com/>

ホームページも



ご覧ください